

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 大津由紀雄

編/池上嘉彦,窪園晴夫,大津由紀雄,西山佑司

著『ことばワークショップー言語を再発見するー』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 窪園, 晴夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000703

大津由紀雄 編／池上嘉彦，窪蘭晴夫，大津由紀雄，西山佑司 著

『ことばワークショップ―言語を再発見する―』

開拓社 言語・文化選書 26

2011 年 6 月 開拓社 四六判 208 ページ 1,700 円＋税



窪蘭 晴夫

本書は「ことば」の仕組みを小中高校の教師向けに解説したものである。2009 年の夏に東京言語研究所で開催された「教師のためのことばワークショップ」での講演とワークショップがもとになっている。本書は次の 4 つの部から構成されている（（ ）内は執筆者名）。

- 第Ⅰ部 言語研究のおもしろさ（池上嘉彦）
- 第Ⅱ部 ことばの曖昧性と方言（窪蘭晴夫）
- 第Ⅲ部 文の成り立ちを探る（大津由紀雄）
- 第Ⅳ部 曖昧表現からことばの科学を垣間見る（西山佑司）

このうち筆者（窪蘭）が担当した第Ⅱ部では、日常生活において意思伝達（コミュニケーション）を妨げる要因として、ことばの曖昧性と方言の多様性という 2 つの現象を分析している。ことばには同音異義語や同音異義文があるため、十分に気をつけないと相手に自分の意図が伝わらないことがある。あるいは自分が聞き手となった場合、話し手の意図を正しく理解できない事態が生じる。一番困るのは、お互い誤解していることに気がつかないまま、物事が進んでしまう場合である。しかし、このような問題の多くは、発音に気をつけると解決することができる。正しい発音がことばの曖昧性を解消してくれるのである。

第Ⅱ部の前半では、ことばの曖昧性としてまずアクセントの問題を取り上げ、このレベルの曖昧性を、(1) のようなアクセントで区別される同音異義語、(2) のように（標準語の）アクセントでも区別できない同音異義語、(3) のようにアクセントのまとまりという点で区別できる曖昧表現、(4) のような枝分かれ構造（階層構造）の違いによる曖昧表現に分類している。

- (1) 大きな [火トカゲ／人影] を見た。

宮城さんが宮城山で宮城産のお土産を買った。

- (2) 汚職事件／お食事券

コブ取り爺さん／小太り爺さん

大きな [蜘蛛／雲] を見た。

(3) 朝ご飯にする？

おじいさんは昔人間でした。
あんな大学に行きたい。
早くつまみ出して。
あそこに行くとよくなるんです。

(4) 日本舞踊協会

ドイツ文学協会
国民性調査

曖昧性の後半ではイントネーションに関わる曖昧表現を、(5)のように区切り（juncture）や枝分かれ構造によって区別されるものと、(6)のように強調のイントネーションによって区別されるものに分けて解説している。

(5) 織田信長は死んでいません。

こわい目のお化け
あの人に気をつけろと言った。
太郎と花子のお母さん
警官は自転車に乗って逃げる泥棒を追いかけた。

(6) これはただの水だ。

太郎は子供じゃない。
情けは人のためならず。
可愛い子には旅をさせよ。

第Ⅱ部の後半では方言に見られる日本語の多様性を取り上げ、その多様性によって引き起こされる誤解を分析している。この中には、(7)のような単語（語彙）の方言差、(8)の「肉」に見られるような意味（語義）の方言差、(9)の「行く／来る」や「あげる／くれる」などに見られる用法の地域差、(10)のようなアクセントの地域差がある。

- | | | | |
|-----|------|------|------|
| (7) | 東京 | 大阪 | 鹿児島 |
| | 疲れた | しんどい | てそか |
| | だめだ | あかん | やっせん |
| | たくさん | ようけい | ずんばい |
| | 大きい | ごっつい | 太か |

(8) 「肉」を買ってきて。{肉＝牛肉，豚肉，鶏肉，魚肉}

隣のおっさん。{おっさん=おじさん, お坊さん, 奥さん}

(9) 明日私のうちに来る？

- a. (標準語) はい, 行きます。
- b. (鹿児島方言) はい, 来ます。

(10)	東京 (標準語)	大阪	鹿児島
	あ <u>り</u> が <u>と</u> う	あ <u>り</u> が <u>と</u> う	あ <u>り</u> が <u>と</u> う
	こ <u>ん</u> に <u>ち</u> は	こ <u>ん</u> に <u>ち</u> は	こ <u>ん</u> に <u>ち</u> は
	マクドナルド	マクドナルド	マクドナルド

方言の多様性から生じる誤解の最後の例として取り上げられているのが、疑問イントネーションの地域差である。疑問文は文末のピッチを上げるとというのが普遍的な法則のように思われがちであるが、日本語の諸方言（北東北方言や九州以南の方言）には標準語や近畿方言などとは逆に、文末のピッチを積極的に下げることによって疑問を表す—平叙文と区別する—という規則を持つものが少なくない。たとえば鹿児島方言では「大丈夫。」という平叙文は、「大丈夫」という語のアクセントのままのピッチパターンで発音され、一方この文の疑問形は文末を伸ばして下降調で発音される（11）。このような疑問イントネーションは標準語話者には疑問文としては聞こえず、しばしば平叙文と誤解されてしまう。

(11) 鹿児島方言の「大丈夫」と「大丈夫？」

ぶ	ぶ
だいじょう	だいじょう う

現代に生きる日本人の多くは標準語と地域方言の二言語併用者（バイリンガル）であるが、標準語と自分の方言を使い分けているつもりでも、標準語の発話に母方言の影響が出てくる。ちょうど日本人が日本語なまりの英語を話すように、多くの日本人は母方言の特徴を残した標準語を話している。標準語で会話しているつもりでも、そこに方言差によることばの誤解が生じている可能性があるため、円滑な意思伝達のためには普段からその危険性を自覚しておく必要がある。

本書には執筆者（章）ごとに読書案内が設けられ、それぞれの内容に関連する基本的な参考文献と簡単な解説が掲載されている。読み足りない読者には、これらの参考文献が役立つに違いない。

窪 蘭 晴 夫 (くぼその・はるお)

国立国語研究所理論・構造研究系教授。Ph.D. (言語学) (エジンバラ大学)。南山大学助教授, 大阪外国語大学助教授, 神戸大学教授を経て, 2010 年 4 月より現職。

主な著書・論文: *The organization of Japanese prosody* (くろしお出版, 1993), 『語形成と音韻構造』(くろしお出版, 1995), 『アクセントの法則』(岩波科学ライブラリー 118, 岩波書店, 2006), *Japanese Accent (The Oxford handbook of Japanese linguistics. Oxford University Press, 2008)*, *Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese (Lingua 120, 2010)*, *Word-level vs. sentence-level prosody in Koshikijima Japanese (The Linguistic Review 29, 2012)*.

受賞: 市河賞 (財団法人語学教育研究所, 1995), 金田一京助博士記念賞 (金田一京助博士記念会, 1997).

社会活動: 日本言語学会常任委員・評議員, 日本音声学会評議員, 日本学術会議連携会員.